

## 自己更生への旅

### ||| ブレイク『ミルトン』第二卷

松島正一

ウィリアム・ブレイク（一七五七～一八二七）の『ミルトン』第二卷は第三十図から第四十三図までである。ブレイクは、第一卷では真の詩人としての使命実現に赴く前に詩人として自己の内部で解決すべき靈感と知覚の問題を扱った。靈感と知覚の理論面を扱った第一卷に対して、第二卷では靈感と知覚に対して詩人としてどのように身を献げるかという精神的問題が主題となる。従って第二卷で起こる事件は少なく、その事件も第一卷で予告された主題を遂行するために必要なものだけである。この事件の展開の順序は時間的な観点からではなく、ミルトンを「靈感を受けた詩人」とみるブレイクの靈感重視の考え方からきている。ブレイクはミルトンが「自我」と「女性の意志」を贖うことによって詩人としての真の自己を獲得できると考えるのである。これはミルトンと一体化したブレイク||ロスの芸術家としての使命でもある。

『ミルトン』第二卷はビューラの幻覚で幕を開く。

対立が等しく正しい場所がある。

この場所はビュラと呼ばれる。それは心地よく美しい影で  
ここでは口論は生じない、眠れる人々のゆえに。

この場所にオロンの息子や娘たちが降りてくる、

敵愾な嘆きとともに、ビュラの月の影と丘のなかに

ミルトンのために泣きながら。黙した驚嘆がビュラの娘たちを把え、  
甘美な愛情と隠やかな慈悲心で魅惑されて。  
（三〇・一七）

ビュラは『四ゾア』においても次のように定義されている。

太古の昔からビュラと名づけられた穏やかで心地よい休息がある。

そこは女性的で愛らしく純粹で温和で穏やかな、

柔らかい月のような領域。眠れる人々に慈悲で与えられ、

神の仔羊によって普遍的人間の内にも

外にも至る所で永久に創造される。

ビュラの娘たちは眠れる人々をすべての夢のなかで追いかけて、

彼らが永遠の死のなかに墮ちないように空間を創った。

（『四ゾア』第一夜、九四〜一〇〇）

ビュイラは永遠界と現世との中間にある空間である。ビュイラの状態は「無垢」に似ているが、「無垢」とは異なる状態である。ブレイクの体系では最高の状態である第四態エデンよりは低次元である。ビュイラは第三態で、想像力が理性によって妨げられる第一・二態の状態よりは優れている。ビュイラは「女性的」「穏やか」「温和な」「愛らしい」場所で、人間が安らかに休息できる所、つまり眠りの状態、夢の世界に似ている。このビュイラの状態は人間にとって魅力的なものであるが、永続的なものではないので、人間はよい高次の状態（Ⅱエデン）に到達するためには「経験」を通り抜けなければならないのである。

月はビュイラの象徴である。というのは、月は太陽の光を反射し、現世の人々の目にその光を永続的なものにするからである。

ミルトンの「流出」であるオロロンがミルトンの死（つまりミルトンが現世に行ったこと）を悲しみながら、ビュイラの世界に下降してくる。ビュイラはオロロンの大きな犠牲を嘆くが、サタンとララブにはオロロンの下降の意味が理解できない。ララブは「更生は知らず、生成のみを知る」（三二・一九）存在であるから。オロロンに対するビュイラ（Ⅱサセックス）の嘆きの幻覚が描かれる。まず、鳥から。

汝は聞く、ナイチンゲールが春の歌を始めるのを。

雲雀は地上の寢床にいて、朝が姿を現わすと

静かに耳を傾け、揺れる麦畑からとび上がり

星の合唱隊を指揮する。トリル、トリル、トリル、

光の翼をはばたく大空に舞い上がり、

美しく青く輝く天の壁にこだまし

その小さい喉は靈感で震え、

喉、胸、翼の羽毛は神々しい声で震える。

全自然は静かにその声に耳を傾け、荘厳な朝日は

山の端に佇み、この小さい鳥を

優しい謙虚と驚異と畏怖の眼で眺める。

その時、緑の隠れ家から大声で鳥たちが歌を始める。

つぐみ、べに雀、うそ、駒鳥、みそさざいが

太陽を山の上の快い眠りから目覚めさせる。

ナイチンゲールは再び歌い始め、日もすがら

夜もすがら華麗にさえずり、すべての歌い鳥は

称讃と愛とをもってその高い調和に心を留める。

これがオロロンに対するビューラの嘆きの幻覚である。

（三一・二八〜四五）

次に花を描いた部分。

汝は見る。すばらしい香りを放つ花を。

だが、その小さい花からこのような香りがいかにして来るかを誰もわからない、その花心のなかでオグとアナクが護る

永遠の扉を永遠が広げているのを忘れてしまえば、

まず、夜が明けると喜びが花の胸を開き、

喜びが涙を流し、昇る太陽が涙を乾かし、伊吹麝香草をはじめとして

ナツユキソウのふっくらとした柔かい花が葦間で揺れながら、

光が空にみなぎり、心地よく踊りはじめ、

樅の木で眠っている忍冬を目覚めさせ、見栄張りの美人は

風にゆられて騒ぎ、愛らしい五月の花、白い山楡子は

愛らしい目を開いて耳を傾けるが、薔薇はまだ眠っている。

あえて誰も彼女を目覚めさせようとしない。やがて彼女は紅色の帳の床を押し開き、

美の女王の姿で現われる。すべての花、

撫子、ジャスミン、匂紫羅蘭花、カーネーション、

黄水仙、内気な百合がその天国を開き、

あらゆる木、草、草木がやがて無数の踊りで大気を満たすが、

すべて心地よく愛らしく整然としている。人間は愛に病んでいる。

これがオロロンに対するビューラの嘆きの幻覚である。

（三一・四六～六三）

作品の焦点はミルトンに移る。今やミルトンは更生の準備が終わり、自我滅却を通して女性の影を永遠の死から救おうとしているのである。ルーシファーであるヒルレルに教えるのは七人の天使たちである。「状態は変化するが、個々の人格は変化もしないし、止むこともない」（三二・二三）と。

「存在の七人の天使たち」とは七つの眼のことで、『ヨハネの黙示録』にある「全世界につかわされた神の七つの霊」（第五章六節）で、それらは「御座の前にある七つの霊」（第一章四節）、「七つのともしび」（第四章五節）、「七つの星」（第二章二〇節、第三節一章）に拠っている。ジョン・ミルトンの『失樂園』執筆の目的は、ブレイクが『ミルトン』のタイトル・ページに引用しているように「永遠の摂理を説き、神の配慮おもいの正しきを人々に証明する（平井正穂訳）」（第一巻、二五～二六行）であった。ブレイクはミルトンの神の秩序に対する揺ぎない信頼は「眼」によって示されるとみている。「眼は心を知る以上のものを見る」（『アルビヨンの娘たちの幻覚』）とブレイクは主張している。ゆえに、存在の七人の天使たちは天界からの下降の際にミルトンに従い、しばしば彼にその本質的天才を見させるわけである。

さらに七人の天使たちはこう説く。

それから汝自身の自我を判断せよ。汝の永遠の容姿を探究せよ。

何が永遠であるか、何が変化するものか、何が滅却されるべきか。

想像力は状態ではなく、人間の存在そのものである。

好意または愛は想像力から分離されると、状態になってしまう。

記憶はつねに状態、理性は状態であり、

創造されては滅却され、新しい比率が創造される。

創造されるものは何であれ滅却されうる。形態は滅却されない。

樞は斧で切り倒され、仔羊はナイフで倒れるとしても、

それらの永遠の形態は永久に存在する。アーメン、ハレルヤ！

(三三・三〇〜三八)

「Self」を「自我」と訳したが、ブレイクの「自我」は現在我々が心理学などで言う自我とは異なったものである。ブレイクの「自我」は我々人間が生まれつき持っている利己主義のことで、真の人間性とは敵対するものである。ブレイクの手紙において、この「自我」が擬人化されると、ユリゼン(Urizen)と呼ばれるものとなる。「自我」は展開するにつれ、妖怪スベックターとなり、サタンとなる。従って、ミルトンの争いはこの「自我」を滅却することにあるのだ。

「状態」は人間精神の状況のことで、これは変化し、滅却できるものである。「状態」は人間の真アイデンティティの在り方と区別されなければならない。人間の存在とは想像力のことで、これは決して変化することはない。ミルトンは「状態」である限りにおいて、「永遠の死」、つまり現世に赴くのである。

ビュラーの歌のなかで聞こえる神の声はバビロンの娘に対する呼びかけとなっているが、ここでミルトンの

更生への道を分析している。

見よミルトンは女性の影と永遠の死より贖おうと

下降したが、汝が愛する者の死と悲惨により、また滅却によって

絶えず贖われるのが汝の運命である。

六重の女性はミルトンが自分自身を滅却することや

彼のすべての愛が彼女によって切り離されるの見て

ミルトンが彼女から離れ、女性の愛から自分を完全に抽出する時、

彼女は死の恐怖で不憫に思うだろう。彼女は

夫に処女たちを与え始め、夫の歓喜を欲ごぶだろう。

その時にのみ、ビューラでしたように、幸せな女性の喜びが始まり、

パピロンの処女よ、売笑婦の母よ、汝は

夜警のなかで汝の腕にジェルサレムを連れてくるだろう。

もはや彼女を街路をさ迷う娼婦に変えることもなく、

彼女を汝の主、夫である神の腕のなかに与えるだろう。

（三三・一一～二三）

ミルトンは「女性の意志」によって物の見方をねじまげられてしまっていて、正しく物が見えなくなっ

まっている。彼は「自我」を打ち壊し、自然との正しい関係を回復しなければいけないのである。自我滅却によつて正しい物の見方を取り戻すことができれば、その時ミルトンは「女性の喜び」を味わうことができるのである。

かつてミルトンが下降したオロロンを探したように、オロロンは地上に下降したミルトンを探している。オロロンは「休息中の人間の四つの状態」の中を通り抜ける。それは人体に基づいたブレイクの体系として示される。

休息中の人間の四つの状態が彼らに示された。

第一はビューラ、優しい音楽とともに柔らかな寝床の上の

とても快い眠りで、ビューラの花々、

自発的な大気の中で翼持ち漂う美女の姿、にかしずかれています。

第二の状態はアラ、第三の状態はアルⅡアルロであるが、

第四の状態は恐ろしく、オアⅡアルロと名づけられる。

第一の状態は頭脳に、第二は心臓に

第三は腰と生殖器に、第四は

怖るべき、ものすごく、言語に絶した胃腸にある。

（三四・八〜一六）

休息とは死の眠りのこと、つまり正しい意識を失っている仮死状態のことである。この四つの状態はビューラからオァールアルロにまで広がっている女性的宇宙である。ビューラの補助的な状態である三つの状態、つまりアラ、アルールアルロ、オァールアルロは、ブレイクの作品では『ミルトン』にしか記されていないが、オロロンがミルトンの下降に従ってビューラを通り抜け、ロスとユニサーモンの所へ下降する時、その行動の意味が明白となる。「その門が肉体の領域のなかで開かれている人は、それらの門からこれらすべての驚異的な想像力を視ることができる」（三四・一七〜一八）と述べられているからである。

オロロンはポリプ (Polypus) を通り越さなければ、ゴルゴヌーザは見えてこないのである。つまり物質的世界での経験をへずして、芸術の世界ゴルゴヌーザには到達できないということを示している。そして、ゴルゴヌーザの時空の幻覚、つまり精神の更生の瞬間は次のようなものである。

おのおのの日々のなかにサタンの発見できない瞬間がある。

また、彼の見張りの悪魔もそれを発見できない。だが、勤勉な者は

この瞬間を発見し、それが増大するのを見る。そして一度それが発見されると

それは正しく置かれれば、目のあらゆる瞬間を革新する。

この瞬間オロロンはロスとユニサーモンの所へ下降した、

見られずに、現世の貝殻を越えてミルトンの跡を南方へと。

まさにこの瞬間、朝の香りが

最初は伊吹麝香草から立ち籠める時、水晶のような岩の中で

泉が湧き流れて二つの川となる。一つはゴルゴヌーザを通り

ビューラを通りロスの西壁の下エデンに達する。

もう一つは空中の虚空とすべての教会を通して流れ

サタンの彼方ゴルゴヌーザで再び出会う。

（三五・四二―五三）

この瞬間は『ミルトン』第一巻での「動脈の一動悸」（二八・六二）の創造的瞬間、つまり「詩人の作品が成就される」（二九・一）時間のことである。この瞬間は、サタンが状態ステイトであるゆえに認識できない靈感そのものである。ここに泉が湧き、その泉から二つの川が生まれる。一つはゴルゴヌーザからビューラを通してエデンに達する川であり、他方は歴史上の教会の教義や墮落した生命のなかを戦いながら流れていく川である。これら二本の川はブレイクとミルトンの旅路をも暗示しているし、第一巻で述べられた「三つの階級」で言えば、前者は「罪人」、後者は「贖われた者」の性格に対応すると言える。

伊吹麝香草の香りは詩人の瞬間への大地の返答であり、この反応は「エデンへのロスの使者」（三五・五四）となる。また、雲雀も「エデンへのロスの使者」となるが、このような時には善も悪もその本質を発揮する。雲雀が昇る所に「水晶の門」があり、そこはルター（Luther）という名の最初の天界の入口となっている。ブレイクの考えでは、ルターの宗教は最後の大宗教で、この宗教を通して永遠界に行くことになる。雲雀の巢は

ゴルゴノーザの東門、つまりロスの前にある。

ロスの前者である「第二十八番目の輝かしい雲雀」（三六・一〇）がブレイクの庭に下降してくる女性オロロンを迎えることになる。オロロンは現世の貝殻の中のポリプのなかに足を踏み入れる。地上の「死の床」で喘いでいるミルトン（IIブレイク）の所に下降してくるオロロンは人間の敵であるから、「女性の形態」をとらないと生殖界に足を踏み入れることができないのである。

オロロンとその巨大な一族は一人の女性、

十二歳の処女の姿となって現われた。時間も空間も

処女オロロンの知覚には存在しなかったが、

雷光のごとく、いやそれよりも速く、処女は

我が家の前の庭に立った。というのもサタンの空間は妄想であるから。

（三六・一六～二〇）

今やロスと一体となったブレイクは、自分がランベスの地からフェルペムまで連れてこられたことを語る。

これは一八〇〇年九月から一八〇三年までの三年間、ブレイクがロンドンのランベスから六十数マイル離れたイングランド南部サセックスのフェルペム村に滞在した伝記的事実と重なる。ブレイクが『ミルトン』の構想をえたのはこのフェルペム滞在中であったが、『ミルトン』執筆の動機が次のように語られる。

私の肉体はランベスの木陰より運ばれ、

ロス私をフェルバムの谷に置いて、私のために

美しい小屋を用意してくれた。私が三年間、

自然の残酷な神聖さと自然宗教の偽善を

暴露するために、これらの幻覚すべてを書くようにと。

（三六・二二～二五）

『ミルトン』三六図の下半分にはオロロンがブレイクの庭に降りてくる場面がデザインされている。ブレイクはオロロンに家に入って、疲労で病んでいる妻キャサリンを慰めて欲しいと頼む。

オロロンの答え。

あなたは永遠界から追放されて下降してきたミルトンを知っていますか。

私は彼を探しているのです。

（三七・一～二）

オロロンは永遠界での自分の行為に恐れて地上に降りてきたミルトンを探しに来たことを告げるのである。

ミルトンはまだ錯誤の支配下にいるのである。彼は「天蓋のケラブ」であり、彼の「致命的な自我のなかにサタンやラハブがいる」のをブレイクは見た。

私の庭のなかに降りてきて、神に対する人間の驚異は

雲と人間の形となって天界から地上に達し、

私はミルトンを驚きで見、彼のなかに

ビュエラの怪物のような教会、暗いアルロの神々、

十二の怪物のような脱人間化した恐怖、サタンの会堂

十二の二倍と九の三倍を見た。これが彼らの分割であった。

（三七・一三〇一八）

ブレイクが見たミルトンは錯誤のなかにいるミルトンである。彼はミルトンが『失楽園』で非難した偶像や邪神がミルトン神学それ自体のなかに存在すると考えている。「サタンの会堂」とは『ヨハネの黙示録』第二章九節からとらえており、これはブレイクやミルトンの芸術家としての仕事を阻害する諸教会を軽蔑的に示している。十二という数字は「これら十二の神々はドルイドのアルビヨンの十二の妖怪の息子たちである」（三七・三四）で明らかにされているように、否定的なものである。

ブレイクは「分割」を否定した。彼はユリゼンが物を分割したことによって永遠界に混沌が生じたと考えている。そして分割されてしまった物や者が、一なる物や者に戻ることが必要だと主張している。

ブレイクはミルトンのなかにサタンを見たが、この時サタンの妖怪もミルトンを見る。

サタンの妖怪は咆哮する海の上に立ち、その眠れる人間の内に

ミルトンを見た。身震いしながら

妖怪は絢爛豪華な二十七重の巨大な悪魔として

波の上に立った。その雷はミルトンに向って声高く轟いた。

（三八・九〜一二）

ブレイクもサタンの胸の中に立ち、その荒廃した光景を見る。その光景のなかに「荒廃した人、荒廃した神の建物、ここに住むへ神秘」であるバビロン、バビロンの洞窟の中で鎖につながれたジェルサレム」などを眺める。ミルトンは自己の内部に隠れているサタン、つまり自らの敵に立ち向かう覚悟をし、サタンの宇宙の東門に立って、次のように宣言する。

サタンよ！ 我が妖怪よ！ 我は汝を滅却し、

汝の場所で汝より偉大となり、汝の幕屋、

汝が汝の意志をなすための外被となり、ついに一人の偉大な者が来て

我が汝を打ち倒すように我を打ち倒し、我が外被となる力が我にあるのを知っている。

かくなるものが汝の偽りの天国の法である。だが永遠界の法は

それとは違う。知れ、汝よ、我は自我滅却を目ざして行く。

永遠界の法は我が汝のためにするように

各自が他人の幸福のために互いに自らを滅却することである。

汝の目的と汝の僧侶たちや教会の目的は、

人々に死の恐怖を押しつけ、

震えと恐怖、恐怖、収縮、卑しき自己主義を教えることにある。

我が目的は人々に死を蔑み、

大胆不敵に威敵をもって自我を滅却しながら邁進し、

汝の法と恐怖を軽蔑して笑い、汝の会堂を異として振り落とすのを教えることにある。

我は天国と地獄の前で、そのまったく偽善的な卑劣さのなかで

自我の正しさを暴露するために来た。万人の眼に

これらサタンの神聖の驚異を広げ、大地に

自然の心臓の偶像の美徳を示し、サタンの座を

その利己的な自然美徳のなかに探し、

神でないすべてのものを自己滅却のなかで脱ぎ捨て、

自我と我の持てるすべてを、永遠に永遠に脱ぎ捨てる。アーメン。

(一三八・二九〇四九)

ブレイクはミルトンの幻覚のなかに錯誤をみている。ミルトンとて時代の子であるのだから、その時代における認識の錯誤に影響されている。ピーター・F・フィッシャー(『幻覚の谷』)によれば「ブレイクはミルトン自身のなかにおのれの正当化を求める自我とキリスト教的自由を求める天才との間の相剋があることに気づい

た。「自我の正しさ」とは錯誤に陥った理性が狂信している自我の正当性のことで、否定的なものであるのは言うまでもない。

ブレイクはミルトンの幻覚を越えて前進しなければならぬ。そのためにはミルトンが除去できなかった錯誤を自分自身のなかで一掃することであった。

さて、サタンはミルトンの宣言に対して、ラッパをならし燃える炎とともに雲に乗ってやってき、なおも自らの優位を主張する。

我は神、生者と死者のすべての審判者である。

ゆえに平伏して我を拜め、我が永遠の意志に

汝の至上の命令を服従させ、我が命令に屈服せよ。

我は善と正義の決定権を握り、剣を抜く

七人の天使たちは我が名を持ち、それら七人の中に我は現われる。

だが我のみが神で、我のみが生ける全てのものなかで

天と地にあつてこう述べ、他の者たちは震え、屈服し、

ついに全てのもが神聖さのなかで慈悲と対立する

一人の偉大なサタンとなり、神の妄想であるイエスはもはや存在しなくなる。

だが、突然ミルトンの周りで、七つの霊が恐ろしく燃え上がる。ブレイクのいる路は炎となり、そこにミルトンが静かに降りてくる。七つの霊が人間の形をとって、数多のラッパの響きとともに巨大な火柱となって、「現世の貝殻」に到着する。

彼らはアルビオンにこう呼びかける。

目覚めよ、アルビオンよ、目覚めよ！ 汝の理性の妖怪を改心させよ。

彼を神の慈悲に服従させよ。永久に火で燃えている

ロスの湖のなかに彼を投げ込め。アーメン！

四ゾアを六千年の眠りから目覚めさせよ。

（三九・一〇～一三）

その時、ロスの溶鉱炉の音が聞こえてきて、七つの霊がアルビオンの山々を越え、南から北へと広がっていくのが見える。サタンは七つの霊の声を聞き、身震いして海を越えて逃げていく。

その時アルビオンは立ち上がった。ビューラの夜のなか、

死の休息所で幻の眼に見られて。その顔は東の方向

ジェルサレムの門の方を向き、呻きながら岩の上に坐っていた。

ロンドン、パース、カエレオン、エディンバラが

彼の玉座の四本柱、ロンドン近くの左足は

タイバーンの暗闇を被い、ウインザーから

プリムローズ・ヒルにかけての足の甲はハイゲイトとホロウェイに延びていた。

ロンドンは彼の膝の間、四重の基礎。

右足はドーヴァーの断崖から海に延び、踵は

カンタベリーの廃墟にかかり、右手は高いウエールズを被い、

左手はスコットランドを。回りが金の胸は

ヨーク、エディンバラ、ダーラム、カーライルを含み、額は

アーリンの土地、アイルランド古代の国の岩に凭り掛る。

頭はロンドンの上にかかる。彼はおのれの具現化された妖怪が

恐ろしい怖れと恐怖で自分の前に震えているのを見る。

彼はジェルサレムとバビロンを見、涙が流れ落ちる。

彼は右足をコンウォールの方へ、左足をボクナの方の方に動かす。

彼は深淵の中を歩いていくために立ち上がろうとするが、

止められ、恐ろしい呻き声をあげ、月のビュエラの

座に沈んだ。彼の強力な守護者ロスは月の下を歩きまわる。

ブレイクの「自然宗教」に対する反撥は、オロロンがミルトンに言う次の言葉のなかにも明らかである。

一体、これはどういうことなのですか。このニュートンの幻想

このヴォルテールとルソー、このヒューム、ギボン、ボリングブルック、

この自然宗教というもの、このどうしようもない馬鹿らしさ。

（四〇・一一〜一三）

ブレイクのヴォルテールやルソーに対する批判は『ノートブック』のなかの「嘲れ、嘲れ、ヴォルテールよ、ルソーよ、嘲れ、嘲れ、それはすべて無駄だ。汝らは風にむかって砂を投げ、風はそれを吹きかえしてしまふ」という詩句でよく知られている。またすでに『ミルトン』第一巻でも「レイハブがヴォルテールを造り、ティルザがルソーを造った」（二二・四一）と述べられていた。

ブレイクは十八世紀啓蒙思想を「自然宗教」と呼び、それを全面的に否定する。ブレイクが最初に彫版した作品が『自然宗教』というものは存在しない』（一七八九年頃）であることは知られている。彼は「自然宗教」を「理性」と同一視し、理性は比率（ratio）と同じになる。『自然宗教』というものは存在しない』の主張は「全てのものに無限を見る人は神を見る。比率のみを見る人は彼自身のみを見る」ということである。

ミルトンは真の詩人、予言者としての在るべき姿勢を述べ、自らの役割を宣言する。ミルトンは威厳をもってオロロンに向って、次のように言う。

滅却できるものはすべて滅却されなければならない

ジェルサレムの子どもたちが奴隷状態から救われるように。

否定があり、対立がある。

否定は諸対立を贖うために破壊されなければならない。

否定は妖怪、人間にある理性的力である。

これは偽りの肉体、私の不滅の精神の外破、

常に脱ぎ去り、滅却されなければならない自我、

自己検査によって私の精神の顔をきれいにするためには。

（四〇・三〇～三七）

フレイクは理性的なるものを攻撃し続けたが、ここで述べられていることは、人間が真の自我を獲得するためには、偽りの肉体を脱ぎ去り、不滅の精神、つまり想像力へとむかわなければならないということだ。そうしないとジェルサレムの子どもたちは解放されない。

次に続く部分は想像力論として重要である。

生命の水に浴し、人間的でないものを洗い去り、

我は自我滅却と靈感の偉大さの中にくる



慈悲心と美徳で行動する人々を絶えず殺害する。

彼らはジェルサレムの破壊者で、イエスの殺戮者だ。

信念を否定し、永遠の生を嘲笑する者だ、

想い出から引き出された自然の心像を模倣することによって

想像力を破壊するようにと詩に要求する者だ。

これらは性の衣服、寂しきの憎悪で

あの箱や帳で隠すように人間の容姿を隠す

それはイエスが引き裂き、今や火で完全に洗い浄められて

ついに生成が更生のなかで呑み尽される。

（四一・一〜二八）

このミルトンの宣言に対して、処女オロロンは絶望にうちひしがれてこう答える。

これが私たちの女性の部分、六重のミルトンの女性なのですか。

この部分は汝の前ではひどく震える、おお怖しき人よ。

私たちの人間としての力は友情の敵しい争いを維持できるとしても

私たちの性的な力ではできず、アルロの中に飛んでいきます。

ここから永遠界での私たちの恐怖のすべてが起ったのです。そして今や想い出が

私たちに戻ってきます。おおミルトン、あなたと私は対立する者なのですか。

おお永遠なる者よ、どのように私たちは死の戦いを戦わされたのですか。

これは存在の外部の空虚、これはアルビヨンの死の床ですか。

あなたが永遠の死に赴くなら、すべてがあなたと共に行かなければなりません。

（四一・三〇～三七、四二・一～二）

オロロンはすでにミルトンと一体になっていることは感じてはいるのだが、完全に融合の状態には達していない。オロロンが自分が「六重のミルトンの女性」であるかと問うのは、自分の内部の錯誤がミルトンを前にすると震えるからである。

伝記的にみれば、オロロンはミルトンの生涯における六人の女性のことであるが、ミルトンの生涯においてこの「性的な」面は彼がなすべき仕事の妨げとなった。ミルトンが詩人として義務と感じたものを十全に実行するにあたって、この「性的な力」は彼の誠実さを制限し、彼を墮落させたのだ。ブレイクはミルトンの女性たちを、このように見ている。ミルトンが完璧な人間存在を獲得するためには、ジェルサレムがアルビヨンに對して在るように、オロロンもミルトンのために在らなければならないのだ。

オロロンは最後の自己犠牲を準備する。彼女が自己犠牲を決行すると、錯誤が真理と分割され、オロロンとミルトンは完全な一体化をなしとげる。

それから月の箱舟のごとくオロロンはフェルバムの谷に下降してきた

血の雲、血糊の流れとなって、恐ろしい雷鳴を伴い、

フェルバムの谷で喜ぶ知性の火のなかに

星の「八」の回りで。一斉に星の「八」は

一なる人、救世主イエス、驚嘆すべき者となる。彼の四肢のまわりに

オロロンの雲は血染めの衣のごとく包まれ、

内も外も織られた文字で書かれ、そして著作は文字通りの表現での神の啓示、

戦いの衣である。私はそれが六千年の横糸を名付けるのを聞いた。

（四二・七～一五）

オロロンとミルトンが一体化したこの時に、イエスが姿を現わすのである。イエスの着衣は「内も外も織られた文字で書かれ」ている。これは第一巻の「大地に生まれるすべての幼児が、六十年の人生の厳しい仕事として読み、諳んじられる、人間の言葉で書かれた著作」（二八・一二～一四）を想起させるが、この両者の相違は想像力と理性、靈感と教義との相違である。ブレイクは人間の生活の戦いを文字通りの神の言葉の戦いと把握している。

ブレイクはアルビヨンの二十四の都市が審判の玉座、大地の諸国の上で立ち上がるのを見る。二十四がそのなかで四重に見える不滅の四大がアルビヨンの肉体のまわりで立ち上がった。

イエスが泣き、

血の雲をまとしてフェルバムの谷からアルビヨンの胸、死の胸に入った。四大が

フェルバムの谷の火の柱の中にいる彼を

取り囲んだ。それから彼らの口に四大は

その四大のラッパを当て、彼らに四方からの風に合わせて吹いた。

（四二・一九〜二三）

ブレイクはアルビヨンの胸に入るイエスの幻覚で六重の女性が離散していくのに応じる。今や結合された四  
ゾアは四方からの風に合わせて鳴り響く。だが、ここには黙示録の幻覚はない。その理由はこの作品『ミルト  
ン』は黙示録を創造するのに必要な幻覚への序曲であるからである。

ブレイクは幻覚から醒めて、現実の生身の肉体に戻る。彼の傍らでは、「歎びの甘美な影」である浄化され  
たオロロン、つまりブレイクにとっては妻キャサリン、が立っている。幻覚が過ぎ去り、雲雀はフェルバムの  
谷から舞い上り、伊吹麝香草はウィンブルドンの丘陵に芳香を放っている。ロスとその一族は偉大な収穫にむ  
けて準備をする。それは人間にとって最終的で完璧な覚醒を生み出すことになる詩人の幻覚である。

リントラとパラマブロンは下界に人間の収穫を見る。

彼らのぶどう搾り機と納屋が開き、天火が用意され

荷馬車も準備される。恐ろしい獅子と虎たちが遊び戯れ、

地上の全ての動物は全力をあげて準備する  
国々の偉大な収穫とぶどう収穫とに行くために。

（四二・三六〇三九、四三・一）

（英米文学科 教授）